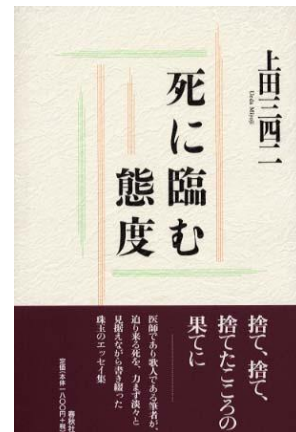


NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

● 井上さんの書籍紹介

「死に臨む態度」
上田三四二 著
春秋社
1993年初版（2002年新装版発行）



はじめに

ありありと陰影欠損の造影像
浄玻璃に吾はひき据ゑられぬ 「湧井」
教科書には なき幸運の除外例
あるいは良性のものかも知れぬ 「湧井」
つくられし 尿管に湧く水のおと
さやけきあきの水音ひびく 「照徑」

私は上田先生を、去年の11月、新聞の歌壇で知った。初めの歌は、先生が結腸がんに、後の歌は、前立腺がんに罹られた時に詠まれた。先生は病を冷静にみつめられながら、一方で、侘しさ、生への静謐な憧憬の念を歌われている。これが縁で、私は、先生の著書『死に臨む態度』に出会った。本書には、先生が54歳から64歳までに書かれた、56篇の随筆が収められている。

上田三四二(みよじ)先生の紹介

大正12年(1923年)、兵庫県にお生まれになる。京都帝国大学医学部ご卒業後、国立療養所東京病院などで内科医としてご活躍され、傍ら、アララギ派の歌人、随筆家として、戦後の文学界を先導された。

43歳の時、結腸がんにて手術を受けられる。60歳時、前立腺がんのため、摘出術を受けられるが、翌年再発し、放射線照射を選ばれる。平成元年(1989年)1月8日没。享年65歳。医学者としての、文学者としての生涯を閉じられた。

本書の内容・感想

私は42歳の時、手術をした。そして、昨日、六度目の正月を迎えた。私の患ったがんは、滑膜肉腫という稀な筋肉にできるがんで、5年生存率が35~50%、10年生存率が10~30%であり、統計的には右肩下がりである。が、市井の凡夫である。5年を過ぎたころから、肩の荷は軽くなり、将来を少し楽観的に捉えるようになった。ただし、平成19年6月、術後3年目の定期検査で、胸部CT検査で転移を疑わせる影が見つかったときは、私は恥ずかしいほど狼狽していた。その後、7月の検査では消えていて、肺炎後の影であったのであろう、ということになったが。だが、この出来事は、私の、人生観、死生観の大きな変曲点となった。

私は、私の今の気持ちを本当にわかってくれる人はいないと、諦めている。何故ならば、私に寄り添うことはできても、誰も私に代わることはできないのであるから。でも、私の胸の内と相似る文章に出逢えると嬉しい。今日、出逢った。お年玉のようである。紹介しよう。五十六回目の誕生日に書かれた。

『十三年前の五月、結腸に悪い病気が見つかって手術をした。以来、再発をおそれながら日をすごし、稀有にして命ながらえ、十年をすぎるころになって、やっと虎口をのがれ得た自分を意識するにいたった。

私は死後を信じることの出来ない不信心者である。私というものの存在を死までの時間と観念している。そういう私が、常人よりも先途のかぎられたその死までの時間をどう生きればよ

いか。そのことを真剣に考えた。真剣に考えたことを充分に実行に移すことが出来たかと問われれば恥じ入らねばならないが、それでも、大患によって私の人生観は大きく変り、死をいつも前面に立てて生きることの緊張が私の人生を励まし、無常を無常として受け入れながら、無常をわがうちにおいて克服することが病後の許された年月における私の課題になった。

いまの私は病後の十年間にくらべれば先途に対してひらけたものを感じている。人生不定、いつどこで何があっても驚かないつもりだが、老後を考える余裕も戻ってきていないわけではない。願わくはその許されるかぎりの生の時間を充実のうちに過ごし、人生をつねに名残の心をもって味わいたい。そう思っている。』（「誕生日」革新 1979 年 9 月号）

本書の表題になっている『死に臨む態度』は、先生がインターンの時経験された、20 歳半ばの、身寄りがない癌性腹膜炎の青年のことから始まる。その青年は、不治の予後にもかかわらず、最後まで、晴朗とすごされたのである。

私も思い出した。市中病院に勤務して 2 年目、私が担当医となった 44 歳の K さんのことである。病院に来られたときは、もう、肺がんの末期であった。亡くなる 2 日前、看護師らと、ベッドで、小さな庭であるが、薔薇を見に行った。そして、その夜、その散歩が至極気に入ったことを久しぶりの笑顔で話し、最後に「先生、段々と空気が薄くなり、息が難しくなっています」と言った。私は、黙って、部屋をあとにした。

この随筆は次のように終わっている。『真に死をおそれぬ人間がこの世にいること、平家物語や太平記の語り草にとどまるものではないと知るのには、私のようなこころ弱い人間には、無上の教訓に、ちがいない。』（新潮 45 1987 年 11 月号）

最後に先生の文字への思いを抄出する。

『道に大きく書かれた字を踏んで歩くのにも、抵抗がある。本や新聞や、そのほか何でも、字のあるものは踏まないようにしつけられた古い世代の感傷だろうか。』（「歩く、食べる、見る」Voice 1981 年 2 月号）私も、「止マレ」を跨いで通るようになった。

会員 井上 林太郎